

## 「ドクメンタ14」をめぐって

清 永 修 全

東亜大学 芸術学部 アート・デザイン学科  
kiyonaga@toua-u.ac.jp

### <要 旨>

国際的にも随一の存在感を放つ現代美術の祭典である「ドクメンタ」の第14回展が開催された。今回は、ポーランド人アダム・シムジックをアーティストティック・キュレーターに迎え、開催場所も従来のドイツのカッセルに加え、ギリシアのアテネに第2会場を設けての野心的な企画となった。今や「伝統」と化した本プロジェクトだが、まさにそれゆえに様々な葛藤が露呈することになる。

キーワード：ドクメンタ、カッセル、現代美術、美術批評、アダム・シムジック

### はじめに

「ドクメンタ (documenta)」展は、現在に至るまで世界でも屈指の現代美術の祭典である。5年に1度ドイツのヘッセン州北部の都市カッセル (Kassel) で開催されている。カッセルは、フランクフルトから ICE (Der Intercity-Express) で北に2時間弱のところにある人口20万人ほどの中都市<sup>1</sup>で、かつて普仏戦争の際セダンの戦いで捕らえられたナポレオン三世が幽閉された地でもある<sup>2</sup>。このドクメンタ展は、第二次世界大戦の終結後しばらくたった1955年、カッセル芸術アカデミーの教授で、芸術家にしてキュレーターでもあったアーノルト・ボーデ (Arnold Bode, 1900-1977) のイニシアチブによって実現されたもので、ナチズム体制下で「頹廢芸術 (Entartete Kunst)」の烙印を押され、弾圧を受けた作家たちの名誉回復と、文化国家としてのドイツの再興を願って構想されたものであった。以後一貫して現代美術のシーンをリードし、話題を提供してきた。今や、時のアート・シーンの展開を占う重要な試金石であるばかり

りでなく、「同時代の文化やその社会政治的なコンテクストをめぐる論争の場<sup>3</sup>」となってきた。その都度の世界の出来事や文化・社会問題などを反映する時代のパラメーターですらある。観客動員数もほぼ回を重ねるごとに増え続け、194人のアーティストが参加した前回のドクメンタでは最終的に90万人を超える観客が訪れ、過去のあらゆる記録を一新している<sup>4</sup>。今回は、その第14回であり、総勢219名の作家の作品が展示されることになり、予算的にもこれまでのものをはるかに上回る3700万ユーロが計上され、大きな話題を呼んだ<sup>5</sup>。本稿では、ごく触りの部分のみに止まるとはいえ、今回のドクメンタ展の横顔に触れてみたい。

筆者がカッセルに足を踏み入れたのは8月13日の正午前であったが、折からの悪天候もあって8月であるにもかかわらず気温は15度ほどしかなかった。小雨が切れることなく降りしきる中、それでもメイン会場の一つであるフ

リーデリチアヌム (Das Fridericianum) やその周辺の展覧会場にはどこにも長蛇の列ができていた。カッセルだけで30を越える展覧会場を持つ今回のドクメンタ展である。その全てに足を運び、隈無く展覧会の全体を見ることなど限られた時間では可能ではないし、はなから期待されてもいないのかもしれない<sup>6</sup>。加えて、本展覧会にはそれをどこから見始めるかというコース指定もない。つまり、訪問客がそれぞれ自分なりの関心で思い思いの場所に赴き、任意に展覧会を切り取り、体験するという関わり方がはじめから織り込まれているということになる。

#### アダム・シムジックと第14回展のコンセプト

ドクメンタ展は、毎回総合プロデューサーとも言えるアーティストック・キュレーターに名うての人材を新規登用し、そのコンセプトがその都度のドクメンタのプロフィールと方向性を決定するというスタイルで運営されており、その展開が注目されていた。今回そのアーティストック・キュレーターに抜擢されたのは、ポーランド出身のアダム・シムジック (Adam Szymczyk, 1970-) である。2003年から2014年に亘ってバーゼル美術館の館長を務め、2008年にベルリン・ビエンナーレのキュレーターを務めたことで、一躍脚光を浴びることになった。指名を受けたのは2013年のことである。それからの4年に渡る準備期間中、かなり意識的に沈黙を守っていた。参加アーティストのリストも開催直前まで伏せられ、メディアの関心を煽ることになった。第14回展のオフィシャルなスローガンは「アテネから学ぶ (Von Athen lernen)」であるが、いくつかの点で従来のものとスタイルを異にしていた。もともとドクメンタ展は、カッセルにおいて100日間に亘って開催されるのが通例であったが、今回はギリシアのアテネとカッセルの二都市において総計163日間開催されることになった。第13回展でも、一部の作品をアフガニスタンのカブールで公開しているとはいえ、コンセプトとして二会場に分けて実施するのは初めての企てであり、物議を醸した。あえて「伝統」と

断絶することで、むしろそのクリエイティブな「伝統」に接続を果たそうという意図であった<sup>7</sup>。

それにしても、なぜ「アテネ」なのだろうか。ルネサンスの時代から新古典主義の時代にかけて西洋美術に規範と理想を提供し続けてきた古代ギリシアの栄光と伝統の意義を振り返り、西洋文明のルーツを確認しようなどという安直で見え透いた西洋中心主義的なイデオロギーが今更まかり通るはずはあるまい。それとも、経済危機のただ中であって国家破産の境を漂う現代のギリシアを言おうとしているのだろうか。だとすれば、一体そこから今さら何を「学ぶ」というのだろうか。一見謙虚な身振りとは裏腹にその真意は測り難い。シムジックによれば、アーティストック・キュレーターへの指名を受けた際、伝統的な開催地としてのカッセルを保持しつつも、一方で「物事を異なった角度から見、読むことのできる視点」を模索しはじめ、そこで行き着いたのがアテネだったのだという<sup>8</sup>。今や自らを「ドクメンタ都市」とさえ形容するドイツの地方中都市カッセルと66万人の人口を擁するギリシアの首都アテネ。この一見脈絡のなさそうな2都市を対峙させ、それを類似性と差異において切り結ぶことで、現代世界の問題、なにかずくその矛盾と「パラドックス」を浮き上がらせようとする。しかし、近年の政治的・経済的コンテクストを背景においてみると、これはその実かなり際どいテーマ設定であることが分かる。南北ヨーロッパの都市を結びつけることで際立つのは、その圧倒的な不均衡さ・格差と抑圧された「南」の姿ではないだろうか。アテネは常々「民主主義のゆりかご (Die Wiege der Demokratie)」として讃えられる都市であるが、第二次世界大戦中はドイツの占領下に置かれていた。現代では上述の経済危機に加え、欧州の難民問題のシンボルでもある。20%を超える高い失業率に苦しむギリシアだが、EUの経済支援政策にあたって市民の生活に直結する年金や社会福祉面における財政支出の削減を再三に亘って要求してやまないのが当のドイツ政府であることは周知のとおりである。そこにドイツの公的財政支援を受けた国際的な展覧会が持ち込まれるのをギリ

シア国民が諸手を挙げて歓迎するとは想像し難い。むしろ、新たな「植民地化」の危惧をもって受け止められすらしている。実際、ギリシア政府の前経済大臣であるヤニス・バルファキス (Yanis Varoufakis, 1961-) は、ドクメンタの企画をドイツのフラポート (Fraport AG Frankfurt Airport Services Worldwide) によるギリシア国内の14の飛行場の買収と比較する<sup>9</sup>のみならず、それを「危機ツーリズム (Krisentourismus)」と揶揄し、挙句「またナチがやってくる。ただし、別の仕方です。」とツイッターに書いて不愉快さを露わにしてみせる<sup>10</sup>。その意味では、開幕以来最初の4週間でそれでも14万人を超える人々がアテネの展覧会を訪れている<sup>11</sup>のはやはり注目に値する。この反響は何に由来するのであろうか。

### 注目作品から

芸術は政治的アクティビズムに堕すべきではないのではという問いに対し、シムジックは、アクティビズムは単なる「イズム」ではなく「ある種の生き方 (eine Art zu leben)」なのだと言いつつ繰り返す。ドクメンタは特に政治的なテーマを掲げていなくとも、「政治的に考える」のだと言う。それゆえ、アーティストの選出にあたっては概ね政治的な根拠があったことを公言してはばからない<sup>12</sup>。実際、出展作品の少なからぬ部分において何らかのアクチュアルな政治的なテーマやコンテキストが変奏しながら縦断している。まずは、とりわけメディアで注目を集めたいいくつかの作品に触れつつ、その一端を覗いてみたい。

フリーデリチアヌムの正面にあるフリードリヒ広場 (Friedrichplatz) にそびえ立つ「本のパルテノン (Der Parthenon der Bücher)」〔図1〕が本展覧会のシンボリックな存在 (Wahrzeichen) であることは衆目の一致するところであろう。それは、アルゼンチンの作家マルタ・ミヌヒン (Marta Minujín, 1943-) によるもので、紀元前447年から紀元前438年にかけてフェイディアスの監督のもとアクロポリスに建設されたパルテノン神殿と同サイズで作られた鉄骨の枠組みを10万冊の本で覆うというプロジェク

トである。しかし、ただの本ではない。それらは、過去から現在にかけて世界中で発禁の処分を受けた書物なのである〔図2〕。ナチスによって禁止されたシュテファン・ツヴァイクの本やトーマス・マンの『ブuddenブローク家の人々』、旧東独で禁止された『ミッキー・マウス』、ロシアで禁止されていた『ハリー・ポッター』、そのほか『不思議の国のアリス』や『ト



図1



図2

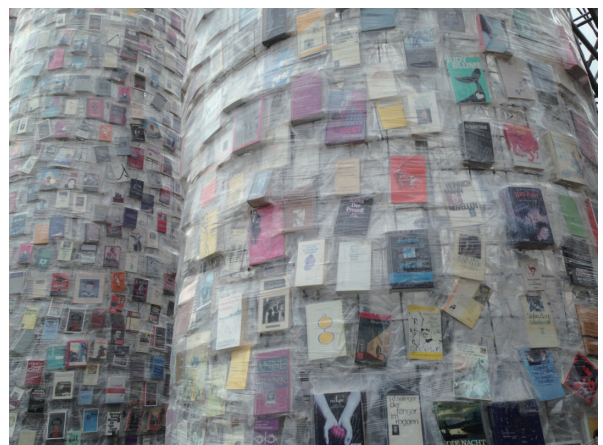


図3

ム・ソーヤ』などもある。エルドアン大統領がますますその独裁色を強めるトルコ共和国からも多くの禁書処分となった書物が貼り込まれているという。ミヌヒンは展覧会に先立って本の寄付を呼びかけているが、それに応じて世界各国から送られた本の1冊1冊がビニールで梱包され壁面や列柱を埋め尽くす<sup>13</sup>〔図3〕。遠目には、ちょうど「タイル」のようにも見える。それは、民主主義のシンボルに身を包んだ「思考禁止のアルヒーフ (Ein Archiv der Gedankenverbote)<sup>14</sup>」なのである。そのパルテノンの形象は、新古典主義の様式で建てられたフリーデリシアヌムと響き合ってその存在を主張する<sup>15</sup>。しかし、このフリードリヒ広場という場所について思い起こすとき、そのメッセージは一層厳しい警鐘として顕現する。実は、ここは1933年5月19日に「非ドイツ的精神に抗する行動 (Aktion wider den undeutschen Geist)」の名のもとナチスによって2千冊もの書物が焚書によって灰燼に帰した場所なのである。「書物が燃やされる場所では、最後には人も焼かれることになる<sup>16</sup>」という1821年のハインリヒ・ハイネの予言的な一節が思い起こされ、思わず眉を顰めずにはいられなくなる。一方、正面に立つフリーデリシアヌムは、1941年以来図書館として利用されていたものの、連合軍の空爆の前に焼け落ち、35万冊に及ぶ書籍が失われる<sup>17</sup>。離れて見ると、どんよりとした曇り空のもと、パルテノン全体が鈍い輝きを放って見える。それ自体ではものを言わぬ書物と神殿が、まさにその沈黙を通して語りかけるかのようである。実はミヌヒンは、すでに1983年にも祖国アルゼンチンで「本のパルテノン」を設置している。軍事独裁政権崩壊直後のことである。そこではアルゼンチンにおける言論の自由の弾圧という出来事に向けられていた作品だが、今回のドクメンタではそのメッセージがいわば「普遍化され<sup>18</sup>」ている。世界各地で政治的反動化の傾向が否定し難く認められる今日、そしてそれに伴って言論の自由の擁護がますます現在の切実な課題となりつつある時代状況において、ミヌヒンの作品は不断の営みを静かに訴えかけてくる。

静けさの中に語りかけてくるといえば、フリーデリシアヌムからさほども遠くないケーニッヒ広場 (Königsplatz) の中央にそびえるオペリスクもそうであろう。特に現代美術に興味のない人であれば、よくある街のモニュメントだと思って知らずにそのまま通り過ぎてしまうかもしれない。オペリスクは、かつて古代ローマの皇帝や軍人たちがエジプトから戦利品として好んで持ち帰っては、ローマの街の中に打ち立てたことで知られる。もっぱら略奪される仕方でアフリカからヨーロッパに持ち去られることになったオペリスクというモニュメント。ふと足を止めてしまうのは、このオペリスクがベトンでできているだけでなく、そこに「私はよそ者であったが、お前たちは宿を貸し与えてくれた。(Ich war ein Fremdling und ihr habt mich beherbergt.)」という一文が刻み込まれているからである。近づいてよく見るとドイツ語だけでなく、4つの面に英語、アラビア語、トルコ語の4カ国語で書かれていることが分かる。それは聖書の『マタイによる福音書』からの一節で、神がすべての民を裁く言うところの「最後の審判」のシーンで語られる言葉である。善き者とされた人々に神の国に入ることが約束されようとするとき、身に覚えのないことと恭しく問い返す彼らに対して神は「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。」と語るのである<sup>19</sup>。これは、ナイジェリア出身のアメリカ人作家オル・オギユイベ (Olu Oguibe, 1964-) の作品「よそ者と難民のモニュメント (Das Fremdlinge und Flüchtlinge Monument)」である。4つの言葉はこのカッセルの街で最もよく話されている言語として選ばれたものだという。難民問題で揺れ動くヨーロッパ社会だが、中でも2015年以来今日までに約120万人に及ぶ難民を受け入れてきたドイツ<sup>20</sup>における市民の動揺は計り知れない<sup>21</sup>。すでに悲しむべき多くの事件が起きている。加えて、この広場は2006年にトルコ系移民が「国家社会主義地下組織 (Der Nationalsozialistische Untergrund = NSU)」による極右テロに倒れた現場から歩いて数分の場所にある<sup>22</sup>。しかし、オギユイベ

の作品は単にドイツ国内やヨーロッパにおける難民問題をのみ念頭においたものではないだろう。国連の統計によれば、2016年現在世界中で6千5百60万人を越える難民がある<sup>23</sup>。人類史上かつてない未曾有の事態である。本オベリクスは、こうした人々の運命に想いを馳せる契機となるべきものはずである。それは「移民、移住者、旅人、難民、異邦人のモニュメント」とならなければならない、とオギューベは言う。先のマタイ書の言葉に時代を超えた人道主義のユニバーサルなメッセージを見て取っているのである<sup>24</sup>。自身追放され難民として迫害を受けた経験を持つオギューベにとって、この問題は人事ならぬ切実なものであった。このオギューベにはアーノルト・ボーデ賞が与えられることになる。しかし、市による本作品の買い上げが検討される中、極右政党である「ドイツのためのオルタナティヴ (Die Alternative für Deutschland = AfD)」の議員が「歪められた芸術 (Entstellte Kunst)」と揶揄し、物議を醸すことになる。それが、かつてナチスが多くのモダン・アートを「頹廢芸術 (Entartete Kunst)」として政策的に弾圧したことに引っ掛けての表現であることは一目瞭然だからである。しかも、彼らは難民による事件が起こるたび、このモニュメントの前でのデモを呼びかけると脅してはばからない<sup>25</sup>。まさに、こうした政治的に先鋭化する不穏な事態が生々しい現実としてあればこそ、本作品の存在は一層重要なものとなるのではないだろうか。

ところで、今回のドクメンタの準備期間中、ドイツでは芸術をめぐるあるスキャンダラスな事件が新聞紙上を賑わせていた。いうところの「グルリット・コレクション (Gurlitt-Sammlung)」をめぐる事件である。ヒトラーのお抱え芸術商であったヒルデブランド・グルリット (Hildebrand Gurlitt) の息子であるコルネリウス・グルリット (Cornelius Gurlitt) が、父から「譲り受けた」1258点に及ぶ芸術作品を数十年に亘ってミュンヘンの自宅に隠し持っていたことに端を発するもので、脱税の疑いから当初数十億ユーロの価値が見積もられていたコレクションが当局によって没収され

る。そのコレクションは、2014年にグルリットが死ぬとその遺言によってスイスのベルン美術館に寄贈される運びとなるが、問題は、少なくともそれらの作品のうち500点ほどにナチスによる「略奪芸術 (Raubkunst)」の疑いが掛けられていることにあった。やがてこの一件は国際的なスキャンダルとなり、隠蔽工作の嫌疑を掛けられたドイツ政府は自ら180万ユーロを投入して調査に乗り出すが、結果としてそのうちわずか11点ほどの由来が判明しただけに終わり、関係者を大いに失望させることになる<sup>26</sup>。シムジックは、この「グルリット・コレクション」をドクメンタで展示しようと目論むが、すげなく却下の憂き目を見る。しかし、逆にその「不在」をテーマにすることで応酬を試みる<sup>27</sup>。今回の展覧会場中最も過密な仕方で作品が詰め込まれることになったネオ・ルネサンス様式のノイエ・ギャラリー (Neue Galerie) がその舞台となる。そこでは、カッセルとアテネの歴史的な繋がりがボレミックな仕方で演出される。18世紀のヴィンケルマンやシラーの名を挙げるまでもなくドイツの知識人たちの古代ギリシアに対する憧憬 (Gräkomanie) はつとに有名だが、それは本展が示すようにドクメンタの創出者ボーデからかつての連邦大統領テオドル・ホイスにまで及ぶ。ヒルデブランド・グルリットの曾祖父で画家だったルイス・グルリットの描くパルテノンの光景は、こうしたコンテキストの中で奇妙な違和感を醸し出す<sup>28</sup>。しかし、こうした中で際立つのは、2階入り口付近の白い無機質でシンメトリックな空間に設置されたドイツ人作家であるマリア・アイヒホルン (Maria Eichhorn, 1962-) のインスタレーション「ローズ・ヴァラン研究所 (Rose Valland Institut)」であろう。部屋の中ほどに天井まで伸びる白い書棚には、移送され殺害されたベルリンのユダヤ人から奪われ、1934年にベルリン市立図書館などに買い上げられた蔵書がぎっしりと詰め込まれている。アイヒホルンは、第二次世界大戦中ナチスに対する抵抗運動に参画したフランス人美術史家ローズ・ヴァランの名にちなんだ自主的な研究所を立ち上げることで、ヨーロッパにおけるユダヤ市民か

らの略奪とその余波について調査すべく情報の提供を呼びかける<sup>29</sup>。「グルリット・コレクション (Gurlitt-Sammlung)」をめぐる一件に対するリアクションであることは言うまでもない。「過去は、政治的決断によって終結するものではない」とは本作品に対するシムジックの弁である<sup>30</sup>。

### 美術批評の反応

さて、本ドクメンタの意義をシムジックは、次のように説明する。「受動性や我々が身をおく状況の回避不可能性に対抗する解放運動に接続しようとする事」、そして「オフィシャルに[自らの]色を明かすことによって、ものごとの流れに対してある違うかたちを与えること」。その意味で、本ドクメンタに展示される作品は、「今日トルコからアメリカにまで至る所で人々に押し付けられる毎度お馴染みの語り (das immer gleiche Narrativ) に抵抗する」多様にして公的なステイトメントのあり方<sup>31</sup>なのだという。紋切り型の言説＝イデオロギーに抗すべくなされる絶えざる差異化の実践ということになるだろう。

しかし、こうした今回のドクメンタ展に対するドイツ国内の批評は予想に反して芳しくない。それどころか、大手の主要新聞各社のオンライン版の文化欄に掲載される展覧会評は、総じてどれも手厳しい。批判の理由は以下の通りである。まず、作家の選出についてである。いざ展覧会が幕を開けてみると、言うところの現代美術の「ビッグ・ネーム」はほとんど見られず、展示作家の多くがさして有名でもないアーティストであったことが落胆を招く。現代美術の最先端の動向を垣間見るべく集まった人たちの期待を裏切ることになったというのである<sup>32</sup>。実際、219名の作家のうち、206名は今回が初めてのドクメンタ展での展示になる。しかも、存命中の作家が163名しかいないのも異例の事態である<sup>33</sup>。シムジック自身は、パウル・クレーの口吻を借りるかのよう「これまでさほど可視的でなかったものを見るようにすること」を課題として掲げてきたことを少なからぬ自負をもって語る。実際、ドクメンタ展

の花舞台であるフリーデリシアムを中心に、26名と今回最多の展示作家数を誇った国はギリシアで、かの地におけるアート・シーンを広く国際的に紹介したことに意義を認める向きもある<sup>35</sup>。しかし、うち11名はすでに亡くなっており、またその展示作品の多くが2000年に開設されたアテネ国立現代美術館 (Nationales Museum für Zeitgenössische Kunst = EMST) からのものでしかなかったことは安直さという点で批判を免れ得なかったようだ<sup>36</sup>。さらに、全体の展示作家の121名が欧州出身者で、以前と違って中国からの出展作家はなく、アジア地域全体で28名、アフリカから18名、南アメリカからはわずか9名というあからさまな「偏り」も非難の対象となる。解放的であること唱いながら、141名の男性作家に対し、女性作家がその約半分の78名であったことも同様である。また、そもそもナチス時代に抑圧・弾圧された芸術家たちの名誉回復から始まったはずの展覧会に、ドイツからはわずか11名の作家が招待されただけに終わったことも不満の材料となった<sup>37</sup>。

それ以上に、シムジック個人の手腕を超えて、ドクメンタ展という企画自体に向けられたホーリスティックな批判は、一層手痛いものである。19世紀以降の歴史的展開の中で次第に「芸術美」という理念が「芸術」であることの必要不可欠な構成要素であることを止め、20世紀の後半にはポップ・アートやミニマル・アート、コンセプチュアル・アートを経る中でついには何らかの形態的・形式的な要素という特性＝アイデンティティーをも失い、「アヴァンギャルド」という時代に先駆ける進歩主義の感性的体現というスタンスも行き詰まりをみせる中で、造形美術は以後ますますメディア批判や社会批判に身を委ねることになる。そうした中で現代の美術は「芸術」外の問題にコミットする「政治的芸術」になっていかざるを得なくなるという議論<sup>38</sup>があるが、ドクメンタをめぐる批評を読んでいると、そのことが一瞬まことしやかに思われてくる。ネオリベラリズムや植民地主義への批判的なジェスチャーといった今回の通奏低音もさることながら、事あるご

とに支配的なシステムをあげつらい、制度批判に邁進するお馴染みのスタイルは「永遠に批判的なドクメンタ (die ewig kritische Documenta)」と嘲笑を買うに十分であったかもしれない<sup>39</sup>。あるいは「抑圧的寛容 (das repressive Toleranz)<sup>40</sup>」の場としてドクメンタという揶揄。展覧会に寄せられるモラリスティックな要請に応えんがために、そしてその正統化のために、勢い「公正さのマシン (Gerechtigkeitsmaschine)」に成り下がり、恥ずかしげもなく「正義」を振りかざす。その陰で、本来的な芸術的課題がないがしろにされてはいないかと指弾する声がある<sup>41</sup>。本企画がフォルクスワーゲン社をはじめとした多国籍企業のスポンサーの「寛大な」支援で成り立っていることも、そこに人がある種の「偽善さ」を感じる理由となるだろう。

#### むすびにかえて

とはいえ、こうした総論的な批判は、それぞれの具体的な作品を前に個々の鑑賞者のレヴェルにおいてなされる感性的経験の問題とそれを提供する場としての意義を看過してしまっている。確かに多くの作品については、パンフレット片手に名前と作品タイトルを確認して足早にその横を通り過ぎるだけだったかもしれない。ただただ首を傾げて、途方に暮れることもある。しかし、その一方で、これだけの人混みの中で押し合いへし合いしながら会場入りして見ていながら、その訪問客がひしめき合う喧騒の中にあっても、ふと人を立ち止まらせ、一瞬ではあれ周囲の人混みを忘れさせ、意識の背後に追いやるほどの惹きつける力を持った作品にも一度二度ならず出逢った。未知のものとの不思議な出会いに身を委ねる音のない瞬間である。美術史家ハンス＝ディーター・フーバー (Hans-Dieter Huber, 1953-) のように本展覧会が過去のドクメンタの中でもとりわけ群を抜いた画期的なものであったとする見解<sup>42</sup>に直ちに同意するかどうかは別としても、そうした体験を可能にしてくれるまたとない場としてのドクメンタの意義はいささかも失われてはいないように思われる。かじかんだ良識や感性をほどこき、芸術に対する先入観

や固定観念を揉みほぐすよい機会を今なお提供してくれている。また、いかに政治的なコンテクションがあったとしても、ドクメンタは単なる政治的プロパガンダの場ではない。その媒介・伝達は、ここで紹介した作品もそうであったようにあくまで感性的なものを通してなされる。その意味で、その制度的な胡散臭さはともかくとして、やはり現代を切実な仕方で受け止めつつ、自らを「表現」する可能性を試し、かつ感性的な仕方でコミュニケーションする場なのだと思います。

なお本報告は、平成 27 年度科学研究助成事業による研究「現代ドイツにおける美的・感性的教育論の新展開」(研究代表者 清永修全) の成果の一部である。

---

<sup>1</sup> 2016年12月31日現在の数値である。そのうち外国人占有率は16.9%ほどになる。URL: <http://www.serviceportal-kassel.de/cms11/verwaltung/statistik/bevoelkerung/> [ 閲覧 : 2017年9月4日 ]

<sup>2</sup> Heribert Prantl: Wo Politik wenig zu bieten hat, Süddeutsche Zeitung vom 13. Juni 2017, URL: <http://www.sueddeutsche.de/kultur/documenta-wo-politik-wenig-zu-bieten-hat-1.3541437> [ 閲覧 : 2017年8月13日 ] あまり知られていないことだが、カッセルは人口に対する美術館や博物館の数においてフランクフルトやケルン、シュトゥットガルトを凌いで、ドイツで3番目の都市になる。Anne Seidel und Ludger Fittkau: documenta 14 in Kassel und Athen - Eine Kunstaussstellung als Politikum, Deutschlandfunk vom 10.06.2017, URL: [http://www.deutschlandfunk.de/documenta-14-in-kassel-und-athen-eine-kunstaussstellung-als.724.de.html?dram:article\\_id=388321](http://www.deutschlandfunk.de/documenta-14-in-kassel-und-athen-eine-kunstaussstellung-als.724.de.html?dram:article_id=388321) [ 閲覧 : 2017年9月2日 ]

<sup>3</sup> チケットと共に配布されるパンフレット Documenta 14 Athens 8.4.-16.7.2017, Kassel 10.6.-17.9.2017 から。

<sup>4</sup> doc archiv - documenta 13., URL: <http://www.documenta-archiv.de/en/documenta/120/13> [ 閲覧 : 2017年8月21日 ]

<sup>5</sup> Documenta war kurz vor Insolvenz, Spiegel-Online vom 13.07.2017, URL: <http://www.spiegel.de/kultur/gesellschaft/kunstaussstellung-documenta-kurz-vor-insolvenz-a-1167316.html> [ 閲覧 : 2017年10月25日 ] 及び Was passiert jetzt mit Adam Szymczyk? Finanz-Fiasko: documenta 14 in Athen verschlang über sieben Millionen Euro, tz.de vom 13.09.2017, URL: <https://www.tz.de/welt/finanz-fiasko-documenta-14-in-athen-verschlang-ueber-7-millionen-euro-zr-8679465.html> [ 閲覧 : 2017年10月25日 ] ちなみに前回のドクメンタの計上予算は2460万ユーロであった。今回の第14回ドクメンタ展では、にも関わらず最終的に700万ユーロの赤字となり、シムジックはもとより、実行委員の責任が追及されるのみならず、展覧会の成果全体に影をさすことになってし

まった。

<sup>6</sup> ましてギリシアの首都アテネで開催された展覧会の両方に足を運ぶことのできる人などはじめから僅かしかいないはずである。実際、この件については、後に触れるアーティストック・キュレーターのシムジック自身が「全てを見て体験しなければならないという義務感を抱くことなく、広がりを経験を愉しんで欲しい」と語っている。Monopol - Magazin für Kunst und Leben, Heft 06 / 2017, S. 76.

<sup>7</sup> documenta-Kurator Adam Szymczyk. "Die Kunst hat eine politische Dimension", Deutschlandfunk vom 13.04.2017, URL: [http://www.deutschlandfunk.de/documenta-kurator-adam-szymczyk-die-kunst-hat-eine.911.de.html?dram:article\\_id=382838](http://www.deutschlandfunk.de/documenta-kurator-adam-szymczyk-die-kunst-hat-eine.911.de.html?dram:article_id=382838) [ 閲覧 : 2017年8月6日 ]

<sup>8</sup> Ibid.

<sup>9</sup> Swantje Karich: Die Revolution frisst ihre Kunst, Die Welt vom 08.06.2017, URL: <https://www.welt.de/kultur/kunst/article165357984/Die-Revolution-frisst-ihre-Kunst.html> [ 閲覧 : 2017年9月2日 ]

<sup>10</sup> Szymczyk. "Die Kunst hat eine politische Dimension": a. a. O.

<sup>11</sup> Monopol - Magazin für Kunst und Leben, Heft 06 / 2017, S. 77. ちなみに、今回のドクメンタ展は、カッセルでも会期中ばですすでに44万5千人の観客を動員し、前回の第13回展を17%凌ぐ勢いをみせ、最終的に会期終了までにカッセルだけで85万人の観客が訪れている。Die documenta 14 steuert auf Besucherrekord zu, Hannoversche Allgemeine vom 27.07.2017, URL: <http://www.haz.de/Nachrichten/Kultur/Uebersicht/Die-documenta-14-steuert-auf-Besucherrekord-zu> [ 閲覧 : 2017年9月6日 ] および documenta 14 ist zu Ende, Zeit-Online vom 17.09.2017, URL: <http://www.zeit.de/news/2017-09/17/ausstellungen-documenta-14-ist-zu-ende-17182802> [ 閲覧 : 2017年9月25日 ]

<sup>12</sup> Szymczyk. "Die Kunst hat eine politische Dimension": a. a. O.

<sup>13</sup> 6万7千冊におよぶこれらの本は、展覧会終了後、会場に集まってきた観客や市民たちに



よって持ち帰られた。documenta 14 ist zu Ende: a. a. O.

<sup>14</sup> Ibid.

<sup>15</sup> Monopol: a. a. O., S. 83.

<sup>16</sup> "Das war ein Vorspiel nur, dort wo man Bücher verbrennt, verbrennt man auch am Ende Menschen." Aus *Almansor: Eine Tragödie* (1821) von Heinrich Heine.

<sup>17</sup> Aufruf: Spenden Sie Bücher für den Parthenon der Bücher, URL: <http://u-in-u.com/de/documenta/2017/parthenon-of-books/> [閲覧: 2017年9月2日] ちなみにミヌヒンは、次なる本の神殿をモスクワの赤の広場で建てることを考えているという。Catrin Lorch: Documenta öffnet in Kassel. Das sind die Highlights der Documenta 14, *Süddeutsche Zeitung* vom 10.06.2017, URL: <http://www.sueddeutsche.de/kultur/documenta-eroeffnet-in-kassel-das-sind-die-highlights-der-documenta-1.3540381> [閲覧: 2017年8月28日]

<sup>18</sup> Hanno Rauterberg: Documenta. Im Tempel der Selbstgerechtigkeit, *Zeit-Online* vom 13.06.2017, URL: <http://www.zeit.de/2017/25/documenta-kassel-kunst-kapitalismuskritik> [閲覧: 2017年8月28日]

<sup>19</sup> 「マタイによる福音書」25. 31-40. 『聖書 (新共同訳)』日本聖書協会 2004.

<sup>20</sup> Frank Specht: Wie es um die Flüchtlingskrise in Deutschland steht, *Handelsblatt* vom 20.06.2017, URL: <http://www.handelsblatt.com/politik/deutschland/bilanz-zum-weltfluechtlingstag-wie-es-um-die-fluechtlingskrise-in-deutschland-steht/19953462.html> [閲覧: 2017年9月5日]

<sup>21</sup> 本年9月24日に開催されたドイツの総選挙 (Bundestagswahl) では、これまで連邦議会に議席を持たず、一度は大きな低迷を見せた極右政党「ドイツのためのオルタナティブ (Die Alternative für Deutschland = AfD)」が突如として12.6%の票を集め、第三政党となる躍進を見せたのも、難民問題がなければおそらくありえなかった出来事である。選挙結果の分析や各国のメディアでの受け止め方については、以下の記事を参照のこと。Bernd Ulrich: Wahl zum Bundestag: Vielleicht gar nicht so schlecht, *Zeit-*

*Online* vom 25.09.2017, URL: <http://www.zeit.de/politik/deutschland/2017-09/wahl-bundestag-afd-opposition-jamaikakoalition-angela-merkel> [閲覧: 2017年10月27日] ならびに Benjamin Reuter: Deutschland rückt nach rechts: Eine Woche nach der Wahl zeichnet sich ein weiterer Erfolg der AfD ab, *Huffpost* vom 30.09.2017, URL: [http://www.huffingtonpost.de/2017/09/30/deutschland-bundestagswahl-afd-rechtsruck\\_n\\_18148784.html](http://www.huffingtonpost.de/2017/09/30/deutschland-bundestagswahl-afd-rechtsruck_n_18148784.html) [閲覧: 2017年10月27日]、Internationale Reaktionen: Schatten über Europa, *Zeit-Online* vom 25.09.2017, URL: <http://www.zeit.de/politik/deutschland/2017-09/internationale-reaktionen-bundestagswahl-auslandsprese> [閲覧: 2017年10月27日]

<sup>22</sup> Lorch: a. a. O.

<sup>23</sup> Mehr als 65 Millionen Menschen weltweit auf der Flucht, *Zeit-Online* vom 19.06.2017, URL: <http://www.zeit.de/gesellschaft/zeitgeschehen/2017-06/fluechtlinge-syrien-zahl-rekordhoch-unhcr?print> [閲覧: 2017年9月5日]

<sup>24</sup> Olu Oguibe auf der Documenta 14. Christus in Kassel, art. *Das Kunstmagazin*, URL: <http://www.art-magazin.de/kunst/20298-rtkl-olu-oguibe-auf-der-documenta-14-christus-kassel> [閲覧: 2017年9月6日] このインタビューの中でオギューベは、カッセルが、かつてはフランスを追われてきたユグノーたちに門戸を開いた街であることに触れ、その伝統を思い起こすことを暗に呼びかけている。

<sup>25</sup> AfD spricht von "entstellter Kunst", *Spiegel-Online* vom 17.08.2017, URL: <http://www.spiegel.de/kultur/gesellschaft/documenta-afd-nennt-kunstwerk-von-olu-oguibe-entstellte-kunst-a-1163271.html> [閲覧: 2017年9月5日]

<sup>26</sup> Nicola Kuhn: NS-Raubkunst. Die magere Bilanz der Gurlitt-Taskforce, *Zeit-Online* vom 14.01.2017, URL: <http://www.zeit.de/kultur/2016-01/gurlitt-sammlung-taskforce-schwabinger-kunstfund> [閲覧: 2017年9月5日]

<sup>27</sup> Monopol: a. a. O., S. 77-78.

<sup>28</sup> Boris Pofalla: Documenta in Kassel. Alle werden eingemeindet, *Frankfurter Allgemeine*

vom 11.06.2017, URL: <http://www.faz.net/aktuell/feuilleton/kunst/superkunstjahr-2017/documenta-14-in-kassel-wo-steht-die-kunst-15055443.html> [ 閱覽 : 2017 年 8 月 27 日 ]

<sup>29</sup> Lorch: a. a. O.

<sup>30</sup> Monopol: a. a. O., S. 78.

<sup>31</sup> Szymczyk. "Die Kunst hat eine politische Dimension": a. a. O.

<sup>32</sup> Ibid., Pofalla: a. a. O., Kolja Reichert: Documenta in Kassel. Ein tiefsitzendes Unbehagen an der Kunst, Frankfurter Allgemeine vom 11.06.2017, URL: <http://www.faz.net/aktuell/feuilleton/kunst/superkunstjahr-2017/unbehagen-an-der-kunst-documenta-in-kassel-15052732.html> [ 閱覽 : 2017 年 8 月 13 日 ]

<sup>33</sup> Swantje Karich: Documenta in Zahlen. 26 Griechen, 11 davon leider verstorben, Die Welt vom 08.06.2017, URL: <https://www.welt.de/kultur/article165320644/26-Griechen-11-davon-leider-verstorben.html> [ 閱覽 : 2017 年 9 月 6 日 ]

<sup>34</sup> Szymczyk. "Die Kunst hat eine politische Dimension": a. a. O.

<sup>35</sup> Seidel und Fittkau: a. a. O.

<sup>36</sup> Karich: Die Revolution frisst ihre Kunst: a. a. O., Rauterberg: a. a. O.

<sup>37</sup> Karich: Documenta in Zahlen: a. a. O., Reichert: a. a. O.

<sup>38</sup> Franz Billmeyer: *Paradigmenwechsel übersehen. Eine Polemik gegen die Kunstorientierung der Kunstpädagogik*, Hamburg 2008, S. 9-14.

<sup>39</sup> Rauterberg: a. a. O.

<sup>40</sup> Ibid.

<sup>41</sup> Pofalla: a. a. O., Rauterberg: a. a. O., Karich: Die Revolution frisst ihre Kunst: a. a. O.

<sup>42</sup> Interview mit Kunsthistoriker: "Haltet die documenta hoch und in Ehren", Hessische Niedersächsische Allgemeine - HNA.de vom 21.09.2017, URL: <https://www.hna.de/kultur/documenta/interview-mit-kunsthistoriker-haltet-documenta-hoch-und-in-ehren-8704315.html> [ 閱覽 : 2017 年 10 月 25 日 ]